

国際社会入門

3.国際関係を理解する——世界の中心はどこにあるのか

富永京子
nomikaishiyouze@gmail.com
Kyokotominaga.com

よろしくお願いします

担当教員の連絡先は以下のとおりです。

Email: kyokotom@fc.ritsumei.ac.jp

Line: Kyoko Tominaga (ID:nomikaishiyouze)

研究室：修学館332号室（月、水、木）

K.Tominaga

授業前の下準備に

- 富永のウェブサイト-「国際社会入門」のページより、毎週**月曜日**に簡単な課題が提示されます。それについて少し考えてきてください。

（本当に簡単なので、授業前の休み時間などでOK）

- URL：kyokotominaga.com

パスワードは「ritsumei」→多分次回もパスワードはかけません。ご自由にどうぞ。

K.Tominaga

前回の授業から

- いろいろおもしろいご意見をいただき、ありがとうございました。授業前に紹介します。
- それに付け加えて、国際社会トリビアや重要な概念も紹介します。今回は「富永先生の社会学お悩み相談」という導入でいきます。

K.Tominaga

「富永先生の社会学お悩み相談」

- 別に、そんなに悩んでないんだろうけど
.....

K.Tominaga

恋人とのすれ違い

K.Tominaga

個人化の時代にどうするか？

- 不安にさせてしまってますみませんでした
- 代わりに何か対策を.....
- 重要な事は「離れた」ことでも「共有する時間が少ない」ということでもない（誰もが誰もとわかりあえない）。
- また「田舎」と「都会」も、実はさほど問題ではない（同じ場所にいてもすれ違うことはあり得る）。

K.Tominaga

人々をつなぐ経験

- 人々が多様化・個人化し、生き方が流動化してしまう、わかりあえない時代にどう分かち合うのか？
- イギリスの社会学者・Kevin McDonaldは、短い時間であっても、**経験**を共有することが重要と述べている
- 「**時間と空間**を共有し、言語的なものだけでなく、非言語的なコミュニケーションを行うこと」

K.Tominaga

人々をつなぐ経験

- ここで注目して欲しいのは「非言語的な」という部分
- McDonaldは、具体的に「音楽に合わせてともに体を揺らすこと」や「一緒にアートを創ること」を挙げている

→ **なんでそんなことでわかりあえるの？**

K.Tominaga

人々をつなぐ経験

- 人々はむしろ、**言語的コミュニケーション**によって**わかりあえなくなる**ことがあるため（e.g. 話題、話し方、言語の違い.....）
- 通信機器の発達のため、**他者と同じ時間と空間を共有することは貴重であり、高い価値があるから**

K.Tominaga

みんなに聞きたい

- 非言語的なコミュニケーションで、他者と「わかりあえた」と感じたことはありますか？特に外国の人々とでなくてもかまいませんので、何かあれば教えていただきたいです。

K.Tominaga

前回の復習も兼ねて

K.Tominaga

ステレオタイプと国際社会（おさらい）

ステレオタイプ

→ 固有の属性を持つ集団（民族、居住地、性別、世代）の特徴を強調して理解・伝達すること

例：大阪府の人＝おもしろい
沖縄県の人＝おおらかだ

K.Tominaga

ポリティカル・コレクトネス（おさらい）

ポリティカル・コレクトネス(Political Collectness)

→ 特定の集団を差別的に描かないような配慮がなされている（政治的に正しい）状態。

→ 多くの場合、多くの人の目に触れる「表現・用語」に用いられる。

K.Tominaga

ポリティカル・コレクトネス

ステレオタイプ

→ 他者の特徴を強調して理解・伝達する。

ポリティカル・コレクトネス

→ 特定の集団を差別しないように配慮した、公正・公平を志向した表現。

K.Tominaga

ポリティカル・コレクトネス

ポリティカル・コレクトネスの例

- 職業表現（「看護婦」→「看護師」）
- 性別（性別役割に配慮した表現）
- 民族（多民族の存在を意識した描写）

K.Tominaga

何がポリティカル・コレクトネス？

「京都に多言語の看板がある」はポリティカル・コレクトネスか？

→ そうではない

⇒ 観光客向けに営利目的でやっている・多言語と言いながら限定されている

⇒ しかし、日本語が読めないことで京都にいる外国人居住者が重大な不利益を被っている場合、「ポリティカル・コレクトネス」と言えなくもない

K.Tominaga

何がポリティカル・コレクトネス？

「大阪人はガラが悪い」はポリティカル・コレクトネスに反しているか？

→ そうではない。単なるステレオタイプ

⇒ そもそもその事実で社会的・政治的差別が起きていないため

⇒ しかし、この表現によって大阪府の人が例えば結婚や就職にあたり重大な差別を受けた場合、ポリティカル・コレクトネスに反すると言えなくもない

K.Tominaga

ポリティカル・コレクトネス

K.Tominaga

何がポリティカル・コレクトネス？



- これは「黄色人種の表現」なのか？それとも、「人種にとられない表現」なのか？

→ 表現の受け手次第ではあるが.....

K.Tominaga

「多様性」が議論を巻き起こす

“Diverse thumbs up! Emojis with different skin tones finally here” (BBC newsbeat, Apr 9, 2015)

“Apple’s new diverse emoji are even more problematic than before” (Washington Post, Apr 10, 2015)

→ 多様性を表現することが、必ずしも「政治的に中立」と言われるとは限らない

K.Tominaga

何を選べば正解なの？

- 国際的に何かをしようと思う場合、「どれを選んでも正解ではない」ことが数多くあります。誰かに配慮した結果、誰かを踏みにじってしまうことはよくあります。

→ ここでダメなことは「じゃあ、何やってもダメじゃん」と思考停止に陥ること。常に何か考え続けることが、国際社会で生きる第一歩なのかな？と思います。

K.Tominaga

今回のアサインメント

「世界の中心はどこにあるのか」



K.Tominaga

前回の続きと見せかけて

K.Tominaga

侵略する者、される者

- 蝶々夫人 (Madama Butterfly, 1904)
- Giacomo Pucciniによるオペラ
 - 19世紀日本を舞台とした悲恋話



K.Tominaga

「蝶々夫人 (Madama Butterfly)」



- 長崎に赴任した海軍士官・ピンカートンが、芸者・蝶々さんと結婚する
- 蝶々さんはピンカートンとの永遠の愛を信じるが、ピンカートンにとっては「一時の結婚」であった
- ピンカートンは結婚後すぐ、米国に戻って、ろくに帰ってこない
- 幼い子供と健気に待ち続ける蝶々さん。しかし、ピンカートンは米国で蝶々さんとは別に妻をもうけていたのだった…。

K.Tominaga

「蝶々夫人 (Madama Butterfly)」

- 自分の価値観をゴリ押しするピンカートン、彼に従うことが幸せだと信じる蝶々さん
- 20世紀初頭における「侵略するもの（アメリカ）」と「されるもの（アジア）」

→ 世界には、自国の価値観を推し進める「世界の中心」と、隷従する「周辺」がある

K.Tominaga

ちょっとおさらい

グローバル化...人・もの・情報の移動が国境を超えること。また、それが増大する状態。

→ 経済的な取引が国境を超えると、どうなるか？

K.Tominaga

より豊かな国になるためには？

- ある時期まで、財の生産や消費・取引は一国の領土の中で行われていた。
- しかし、一国の領土の中では天然資源や農地も、労働力も限界がある。そこで、自分たちよりも弱そうな他国を侵略しようとする。
- 新しい領土を確保し、市場活動や資源獲得を行うことで、自国を繁栄させるのが、**帝国主義**。

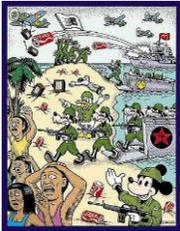
K.Tominaga

お金の問題から文化の問題へ

- ある国が他の国を侵略するにつれ、経済だけでなく、文化や価値観においても侵略がすすむ
- 「侵略する国 = 中心にいる国 = 優れている国」「侵略される国 = 周辺にいる国 = 劣っている国」
- こうした侵略の正当化を**植民地主義**と呼ぶ

K.Tominaga

愛されるミッキーマウス？



- ウォルト・ディズニーが生み出した20世紀最大のキャラクター「**ミッキーマウス**」
- 近代化された服装、スポーツ・車など、「**20世紀のアメリカ（ニューヨーク）**」を象徴する存在
- アニメ映画を通じて「アメリカ的な存在」をコマーシャルし、世界中を惹きつけた
- 一方で、アメリカ的な大量消費・軍事への傾倒・侵略を象徴する存在とされることもある

K.Tominaga

侵略する国・される国

- 「侵略する国（中心にいる国）」「侵略される国（周辺にいる国）」はどのように決まるのか
- 侵略する・される関係は、どのように逆転するのか

K.Tominaga

侵略する国・される国

- 「侵略する国」「侵略される国」はどのように決まるのか
- さまざまな要素が密接に絡むため難しいが、基本的にはその時期における経済的な「先進国」。17世紀フランス、19-20世紀イギリス、明治期日本、アメリカなどが「帝国」として知られていた。

K.Tominaga

侵略する国・される国

- 侵略する・される関係は、どのように逆転するのか

→ **従属理論**は、基本的にはこうした関係性はずっと変わらないとした
 ⇒ 先進国が経済発展し続けるには、途上国を搾取し続けなくてはならない

K.Tominaga

世界システム論

- こうした関係を概念上の位置で示したのが**世界システム論**
- 高度に経済発展した国を「**中心**」、それらの国々に対して農作物や天然資源を供給するしかない低開発国を「**周辺**」と呼んだ
- ⇒ 従属理論でも世界システム論でも、**侵略する・される関係が逆転する可能性は、きわめて小さい**とされる

K.Tominaga

ナイキの児童労働



- アメリカのスポーツブランド・**ナイキ**
- バングラデシュ・インドネシア・ベトナムなどで、低賃金・長時間にわたる児童労働をすすめた
- ここにおいて「中心」はアメリカ、「周辺」は東南アジア諸国
- この状況とは逆に、東南アジアのブランドやメーカーが、アメリカの子どもたちを働かせるという状況を想定することは難しい

K.Tominaga

今日のまとめ

【今週の出席がわりに】
お配りしたレポートを書いてご退席下さい。

K.Tominaga